

現代作家論

奥野健男

近代生活社

著者紹介 1926年7月25日東京
生、東京工業大学卒。
「自然主義文学の再評価」その他で評論
活動をつづけ主著に「太宰治論」がある。

現代作家論

昭和三十一年九月三十日 印刷
昭和三十一年十月五日 発行

定価 貳百九拾円

地方 参 百 四
売価

著者 奥野健男おくの たけお

発行者 松尾金治

印刷者 草刈親雄

中央製本印刷株式会社

発行者 近代生活社

東京都豊島区池袋二ノ八八五
電話(97)九七五五・九七六三
振替東京一九四九〇番
カパー・小宮山印刷株式会社
落丁本乱丁本はお取替いたします

現代作家論 目次

三島由紀夫論……………	七
——にせナルシズムの文学——	
椎名麟三論……………	五三
——感傷性の文学——	
大岡昇平論……………	九一
——シニズムの文学——	
島尾敏雄論……………	一二三
——被害者の文学——	
武田泰淳論……………	一三九
——劣等感補償の文学——	
安岡章太郎論……………	一六九
——相对安定期の文学——	

梅崎春生論……………一八三

—おかしさの文学—

丹羽文雄論……………一九五

—自我不在の文学—

中野重治論……………二一九

—ボレミークの文学—

伊藤整論……………二六九

—平衡操作による文学—

あとがき……………三二三

装幀

勝呂忠

現代作家論

三島由紀夫論

―にせナルシズムの文学―

三島由紀夫の文学を論じようとすると、ぼくはいつもある当惑を感じてしまう。それはなにも三島由紀夫をめぐる、才能や日常生活に関する「恐るべき子供」といった類いの、さまざまな伝説に関係したことはない。ぼくが当惑するのは、三島文学がもっている本質的な矛盾、すなわち作者の意図するところと、彼の身についた手法との、あまりにもはなはだしい乖離に、ひつかかるからにはかならない。

三島由紀夫が、文学において意図するものは、唯美的世界の形成にあるといつてよいだろう。『花ざかりの森』の頃の抒情的、神秘的な美、『盗賊』の頃の巧緻な装飾的な美、『禁色』のギリシヤ彫刻のような調和的な美、と次第次第に内容は変化しながらも、彼が一貫して目ざしているものは、自己の作品を完璧な美そのものたらしめることにあつたといえよう。しかしこのような意図にも拘らず、三島の作品のどれがこのような美を感じしめるものであつたろうか。彼の作品のどこに抒情的な美しさが、美的な感動が、あるであろうか。また『禁色』を読んでギリシヤ的な

調和の美を感じるものがあるであろうか。まして『秘楽』には彼が意図した「破局に陶冶される美の姿」などどこにも存在していないのである。ぼくは残念ながら彼の作品からほとんど彼のいうところの美を感じる事ができない。ぼくには、彼が小説を、美術品いや工芸品と思いがいいしているように思えるのだ。彼の『彩絵硝子』からはじまる『接吻』『クロスワード・パズル』等の数多い短篇は、単なるしやれた思いつきから書かれた、巧妙な工芸品のような感じがする。これらのことはばくに「小説における美」というものについて改めて考えさせてくれる。小説からうける感動や快感が果して美といえるかどうかを。あらゆる芸術に共通な普遍的な美という概念を、あまり信用しないばくにとつて、彼が小説によつて実現しようとしている美というものが理解出来ない。

しかし彼のいうところの美を、感ずることができないにも拘らず、ぼくは三島の作品を好むし、高く評価するのだ。それは彼の作品が、鋭い分析と、あざやかな截断および正確な論理によつて書かれているからである。ぼくはあらゆる既成概念に対する、三島の痛烈な批判と悪意とを買ふ。現象の裏にかくされた本質に対する正確な洞察力を買ふ。だがこれらのことは、彼が目ざしている調和的な美の形成とは、全く反対の性質のものなのだ。つまり彼は壊し道具をもつて宮殿をつくりあげようとしているに等しい。そしてぼくは三島の身についた方法や批評精神には同時代の文学の最大のけない手を発見するのだが、彼が文学において実現しようとしていることは、ずれと錯誤としか、感じる事ができないのである。

ばくは、はじめて『仮面の告白』を読んだときのおどろきを忘れることができない。それは自己の幼時からの異常な性心理を、すべてあからさまに告白した大胆さと勇氣とに對するおどろきでもあつた。それはこの日本という性に対する羞恥の強い、そのくせ人の日常生活の裏をのぞくことが大好きな、私小説的な社会で、こんなことまで書いて大丈夫かという、彼の今後の社会的生活に對する危惧でもあつた。しかしばくがもつとも注目したことは、その内容の論理的な正確さと、分析的な手法であつた。元來かくされた自己を告白することは、私小説を成立させているもつとも基本的な方法といつてよいのであるが、しかしその告白は行為や行動を、そのまま報告するだけであつて、決して自己を分析し、その本質をあばくようなことはしないのである。單なる身辺雜事的現象の無自覺的な記述を、自己告白、自己追求と誤り思つていたのである。いや前近代の日本社会を基盤として發生しきかえた、私小説という前近代的な文学の方法では、事物の本質をえぐり出すことはできないのが、當然といつた方がよい。たとえば自己の性のことを取り扱つても、性行為やその情緒に耽溺して無批判に感性的に描くか、あるいは逆に、日本的な性に對する罪の意識でもつて、肉欲に對する葛藤を、自虐的に觀念的に描くか、そのどちらかではなかつた。ところが『仮面の告白』は單なる性體驗の無自覺的、感性的な記述と異り自己の性の本質を自覺的な方法により、容赦なく分析しつくしている。しかも彼はなんらのタブーも羞恥も感じないごとく自己の異常な性願望を冷静に、淡々と告白している。

このような『仮面の告白』の彼は、それまでの作品——『花ざかりの森』や『岬にての物語』

あるいは『輕皇子と衣通姫』など——からうけた、芥川龍之介の初期を思わせる、唯美主義の匂いの濃い、自分のことなど決して書かない、気取り屋の少年作家三島由紀夫という印象とは、全くつながらないものであつた。一体この優等生的作家に、どのような突然変異が起つて、自己の性心理の告白を行い得たのであろうか。ばくはこの三島由紀夫のその後の作品に、異常な興味と期待とおぼえたのである。というのは彼が『仮面の告白』で自己の性に対してもちいた自覺的な方法を、すべての対象に向つて及ぼした時、日本に今までなかつた、正確な人間認識の方法としての文学が生れるはずであつたから。そしてこの方法によつて既成の社会通念のまやかしをあばき、人間の行為の眞の動機を、日常性の奥に潜む人間の存在そのものを見きわめる、文学が期待し得たのだから。

しかしこのような多くの期待は、その後『愛の渴き』などの少数の作品を除けば、ことごとく裏切られた。多数の短篇は依然として、思いつきによつてつくられた工芸品に過ぎないと言つてよいし、『禁色』その他で試みられた美的世界の形成の意図は、ばくにはアナクロニズムとしか感じられないのである。そしてこの手法と意図との背反は、すでに決定的な『秘案』の破綻となつてあらわれている。

『仮面の告白』において自己の性に対し、あれほど十全に分析の才能と自覺的な手法を發揮した彼が、どうして美的世界の形成という意図にあくまでもこだわるのであろうか。また逆にもし自己の作品を完璧な美そのものにするのが、彼の唯一の目的であつたならば、なぜ分析的な方法に

よる『仮面の告白』を書いたのだろうか。どうしてそのような方法を体得し得たのであろうか。

しかもこの意図と手法の乖離という事実、作者自身気づいていない、あるいはみとめようとしないのである。彼のような作家がこんな明瞭な事実に気づかないということは、ほとんど考えられないような奇妙な事態だ。ばくのこの評論における最大の関心は、この間の事情を明らかにして行くことにかかっている。

2

三島が幼い頃から老成した小説を書きはじめていたという事実が、彼を早熟の天才とする通説の根拠になつてゐるが、別にそれはおどろくべきことではない。少年というものは、大人が考えてゐるより遙かに大人であり、なにかに凝り出すと、深入りし、ひとかどの専門家になる少年はいくらでもゐる。昆虫や切手の蒐集狂、ラジオや模型飛行機組立の大家、囲碁や将棋の、あるいは絵画やピアノの名人、三島はちようにそれと同じように小説をつくる事に凝つたのである。他の少年がこのような遊びに深入りして行くのに際して、人生体験も、自我の内容も、関与しないごとく、三島の小説も体験や自我からは無縁の存在であつた。彼は、物語や絵などによつて触発された思いつきを、幼時から読んだおびただしい書物から得た知識、他の作家の技法の巧みな模倣、お伽話的な空想、これらをもとにして、積木細工や詰め将棋でもやるように、全く知的な操作

により、作品としてつくり上げるのである。そのよい例が、彼の十六才の時の作品『彩絵硝子』である。

「宗方禎之助氏はたしかに幸運児だったのである。なにしろ中将だ。さうして男爵だ。同期の中でも五番をくだらぬ出世番付の筈である。結婚の時は『嬉しい』と思つた。それだけだ。」
「何にまれ尊敬者といふものは、いちばん軽侮への転身に、鮮やかであり長じているのである。」

「憎悪だけが二人の絆だ。闘争ともいはれるやうな最も物慣れた人々の間に交はされる型式によつて、かれらの愛が出発したのは、とりもなはずかれらが内気に過ぎたからだつた。」
年端行かない子供が、何でもわかつたやうな口ぶりで、大人の生活を断定する。この恐ろしくおしやまな子供の断定は、滑稽というより他はない。だが問題は、このような早熟にあるのではなく、彼がこのような断定を滑稽とは思つていなかったことにある。大人の生活とはこのようなものだ、ほんとに考えていたことにあるのだ。

というのは、三島はその頃の作品で男女の恋愛についても同じやうな調子で断定して描いている。ところが『仮面の告白』によれば、少年時の彼は、女に対し肉感を抱いたことが実際には一度もなかつたことと、それにも拘らず「あらゆる点においてぼくは皆と同じ人間だ。」「誰もこんなものだ。」と信じていたことが述べられている。彼は男女の恋愛を、自分の実感からではなく、小説から得た言葉だけで理解し、作品に組立てていたのだ。そして自分が他人と異つてゐること